

# 2003年カンボジア王国国会議員選挙で国際監視員を体験して

清水麻緒(国連大学高等研究所プログラムアソシエート)

7月23日(水)

私は、ANFREL チームに入り、タケオ州に派遣されることが、昨日決まった。朝の8時に、滞在していたプノンペンのゴルディアーナ・ホテルを車を出発した。パートナーは LTO のタイナと STO のスナイの2人である。今回が選挙監視初めての私は、カンボジアという国が一体どういう国なのであろうか、また選挙監視というのはどういうものなのだろうか、というかなり大きなクエッション・マークと不安を胸に抱いていた。カンボジアについて知っていると言えば、高校生の時に読んだポルポト派による大虐殺。そして、10年前の選挙の際には、国連ボランティアの中田厚仁さんと、文民警察官であった高田警視がカンボジアで亡くなられたということである。そんな、疑問と不安が多い私にとって、タイナとスナイは、カンボジア情勢に詳しく、選挙監視活動においてベテランのパーフェクトなパートナー達であった。私は、選挙監視活動中、この2人から大変多くのことを学んだ。

まず、LTO のタイナは、フィンランド出身のジャーナリストで、フィンランドでは通信社で働いている。ヘルシンキ大学で、東南アジアの政治を教えており、東南アジアの政治のエキスパートである。また、過去のカンボジアの選挙にも参加している選挙監視のエキスパートでもある。彼女は、地元の日線から絶えず物事を理解し、そして地元の人達のためへの小さな心遣いを忘れない素敵な女性である。STO のスナイは、タイ出身で、人権・民主主義活動で有名なタイの NGO のフォーラム・アジアで現在働いており、以前は ANFREL のディレクターもしていた。カンボジア政治と言えばスナイらしく、選挙監視のミッション中、車での移動中には、スナイの携帯電話に、ラジオやテレビからの実況中継のインタビューの電話が頻繁に掛けられてきた。実はスナイとは、以前に出会っていたことがあった。直接は会っていないのであるが、去年、私が出席したバンコクのエスキップで開催された人権と市民社会の国際会議で、彼がモデレーターを務めていたのである。プノンペンからタケオ州までの2時間の車の中で、私達はお互いについてより良く知るため、会話が弾んだ。

そして、プノンペンからのドライバーを務めてくれた、42才のカンボジア人のデーさん。彼は、他の国で生まれていたらエリートであっただろうと思われる、凄いバックグラウンドを持ったドライバーである。彼は、国費留学でロシアに7年間留学していて、経済学の修士号を取得している。デーさんは、実は英語を殆ど話さないのであるが、ロシア語がペラペラである。だから結局どのようにコミュニケーションを彼ととったかと言うと、タイナによるロシア語の通訳である。タイナはフィンランドで大学生をしていた時にロシア語を勉強していたことがあるが、ロシア語をこれだけ使うことになったのは、カンボジアに居る時だけであると言っていた。経済学修士号を持ちロシア語を話すデーさんが、何故政府の仕事をせずに、ドライバーをしているのだろうか？というのが私のカンボジアに居る間中の疑問であった。日本に帰国してから、カンボジア大使館で3年間働いていた同僚に尋ねたところ、ドライバーは悪い仕事では無いと言っていた。政府の仕事が良いとは限らない。外貨を早く稼げるのは、ドライバーの仕事である。確かに、国民一人当たりの年間所得が250ドルであるのに、外国人相手の仕事であれば、その額が、1週間で稼げてしまうのである。

タケオに着くと、どしゃ降りの雨が降っていた。タケオで待っていた通訳のサロムと合流し、野外のマーケットにレイン・コートを買に行った。スナイがレインコートを持って来ていないので買いたいということだったので、プノンペンで出発前にスーパーマーケットに寄ったのだが、レインコートが置いてなかった。私は、黄色のレイン・コートを持ってきていたのだが、タケオの雨は下から降っているような感じで、予想よりも凄かったため、膝上までのレイン・コートは短すぎた。メイド・イン・タイランドと書いてある、くるぶしの上までくるような、紺のしっかりとした生地のレイン・コートを買った。レイン・コートと同じ所にあった、黒い長靴も買うことにした。スニーカーを履いていたのだが、この雨ではスニーカーは良くないであろう。タイナとスナイは、サンダルを履いていたのであるが、確かにサンダルは暑い夏の国で、雨の時には良いさそうなのであるが、私は、蚊に刺されるのが嫌だったので、長靴を買うことにした。これで、タケオでの滞在の準備はばたんたんという感じである。タケオでの旅を終えた時に思ったのは、この時、長靴を買っておいて良かったということである。道路が舗装されていない、ひどい泥道であるし、雨が良く降るため、長靴は1週間の間手放すことが出来なかった。

マーケットでのショッピングを終えて、準備が整った後、昼食を食べに行った。英語に訳せば、Peaceful Heart という意味のレストランで、タイナがお昼にいつも利用しているレストランである。地元向けのレストランで、料理は既に来上っており鍋に入っている。鍋の蓋を開けて、中を見て、好きな料理を選ぶ。皆は、魚の煮物料理を選び、私は、チキンカレーを選んだ。タイナが、ここでは、野菜があまり無いから、果物を沢山食べた方が良いよと教えてくれた。私達は、食後に必ず果物の皿を一つ注文することにした。トイレに行ったが、かなり汚く、蚊も飛んでいる。タケオでは、トイレがあればまだ良い方で、トイレのある家は、全体の4.3%だけである。タイナが、中には本当にひどく、目と鼻を覆わないととてもじゃないけれど入れないような所もあると言っていた。確かにその通りで、私は、その後、目を覆うまではいかなかったが、鼻を覆わなければひどい異臭が漂い、もどしてしまいそうなトイレにも行った。だから、なるべく、どこのトイレが綺麗なのか覚えておき、闇雲にトイレに行くのではなく、比較的綺麗な所で行くことにした。

昼食後、Lchampa 地区にある CEC を訪問した。5人のスタッフがいて、皆教師であるという。カンボジアの3回の選挙に関わっており、経験のあるスタッフである。選挙法と投票に関する2種類のトレーニングを受けている。地域の家々を周り、選挙教育を行ってきた。NEC から渡された、テープなどの選挙教育の教材を配ったという。前回の選挙では、投票率が88%であった。男女共、同数位の投票者だったようだ。CEC のスタッフによれば、投票に来れなかった10%位の人々は病気であったからである。雨が降れば、投票率が下がるだろうかという質問に対しては、雨の影響は出ないであろうという回答だった。「人々が指導者を選べるということは、良いことである。皆、投票に行くことを楽しみにしている。」明日、PEC から、投票関連の備品が全て届くことになっている。万が一停電になっても、電気のバックアップの自家発電を用意してあるという。質問を一通り終えて、CEC を後にした。カンボジアの人達は どうしてこんなにも多くの人が選挙に行くのに、日本では選挙に行かないのであろう？という疑問が、頭の中に大きく残った。日本では、ただでさえ投票率が低い上に、雨でも降れば更に低くなることであろう。

夕食を屋外のシー・ショー・レストランでとった。英語のメニューも有り、他のレストランより高く外人向けのレストランのようだ。一人大体3ドル位である。カンボジア料理は、予想外にとても美味しかった。昼間のレストランは、日本人の私にはちょっと辛いですが、夕食をとったレストランは、とても美味しかった。これなら、仮に日本食が無くて一年中毎日食べることになっても、全然平気である。魚料理が多く、中華料理のように油を多量に使っているわけでもなく、日本人の口に非常に良くあっていると思う。夕食は、OHCHR のカンボジア事務所の職員であるアメリカ人のケンと彼のアシスタントであるカ

ンボジア人のマリーさんと同席した。ケンさんは、カンボジア生活が長くカンボジア人女性と結婚している。ラタナキリ州に家があり、家族で経営するホテルを作る計画が現在進行中である。アジア人女性と結婚することは、家族と結婚することだ、とチャームングにケンさんはウインクした。

夕食後、ゲスト・ハウスに帰って来るなり、停電が起こった。時計に電気を付ける機能が付いているため、時計の明かりをもとに、スーツケースの中から懐中電灯を探し出し、電池を詰めた。停電は、短い間だった。停電した時のための自家発電の設備があったからだ。スナイが CEC で投票日に停電した場合のことを尋ねたのが良く分かる。長い一日の後で、すぐにでも眠りに付きたかったのであるが、虫除けスプレーを一杯掛けていたのと雨や泥で汚かったので、シャワーだけは浴びて眠ることにした。何と、シャワーは水だけである。暑い所だったら、水だけのシャワーでも構わないのであるが、タケオは、暑いどころか、大雨で気温が下がっていた。心臓に響く冷たいシャワーを出来るだけ早く浴びて、その日は眠りについた。

### 7月24日(木)

朝の7時にゲスト・ハウスを出発し、OHCHR の2人と朝食をとった。私は、オムレツを食べたが、ライムの輪切りと塩と胡椒を混ぜたものが添えてあり、カンボジア風のオムレツはとても美味しかった。

朝食後、PEC であった、毎週行われるミーティングに参加した。CEC、政党などが参加し、毎週木曜日に開かれる。多くの日本人とこのミーティングで出会った。今日のミーティングには、政党のメンバー、国際監視員、アメリカ大使館、日本政府による派遣団、国際 NGO、地元 NGO が参加していた。日本からは、3つの NGO が参加していた。ミーティングはかなり長く、投票箱の封の仕方のデモンストラーション等、殆どが投票に関する技術的内容であった。投票箱が持ち込まれた時に、スナイがああ投票箱は日本政府から提供されたのだということをお教えられたのには、びっくりした。カンボジアの選挙で、「日本政府提供」と印刷された大きな大きな銀色の投票箱が、全国で使われているということ、一体日本に住んでいる日本人で知っている人はいるのであるか？投票箱もそうであるが、日本政府からの選挙監視団も大きく、一国が送っているものでは、最大であろう。EU の派遣団は、一国でなく、EU のメンバー国の派遣員の集団であり、日本のように一カ国が派遣しているものではない。日本がカンボジアの民主化に先進国として支援しているのはとても素晴らしいことであるし、日本人としてとても誇らしいことである。ただ、皮肉に思われたのは、この大きな支援をしている国の一般市民は選挙や政治に関する意識がとても低いことである。ましてや、自国の支援で提供された投票箱がカンボジアで今使われているなんて、一般市民は知らないであろう。

PEC の報告によると、選挙のキャンペーンではどの政党も規則に従っており、暴力行為は見られなかった。選挙のキャンペーンの終了時間とキャンペーンに使用されるサインボードとポスターに関する規則に関して議論がなされ、キャンペーンは25日の午前零時に終了し、キャンペーンの終了時にはサインボードは取り外せないものはカバーを掛け、ポスターははがさなければならぬということに、皆が合意した。

ミーティング参加者からの疑問点が挙げられた。ある党のメンバーが、他の党が投票者達に白いカードを配っていると言って、見せてくれた。手の平に入る位の小さなものである。投票所などが書いてあるものである。非難された党のメンバーは、それは、投票所などが分からない人が選挙に行かれるようにするために配ったものだと言った。アメリカ大使館の人が、選挙の登録者カードが没収されるケースがあり、没収された地元の人も理由が分からないでおり、このことは重要な問題であるから、更に調べる必要があるという点を挙げた。

昼食後、COMFREL を訪問した。COMFREL のオフィスの前でブタが2頭ウロウロしていた。タケオでは道のあちこちでブタが散歩しており、タイナが道の王様だと言っていた。COMFREL で、ある党がタケオの全ての地域でクーポンを配っているということを知った。もしその党が勝てば、村人はプレゼントを貰えるし、もし負ければ、何も貰えないということである。26日の夜に、ある党が村人達にお金で票を買いに回るといった情報も入っているという。また、今日は政府の役人達は仕事がなく、与党であるCPPの集会に動員されたそうである。

CPP党のメンバーがキリボンで交通事故に遭ったということを知ったので、このニュースの真偽性を確かめるために病院に向かうことになった。本当に交通事故なのか、それとも政治がらみの事件なのか？ジャーナリストのタイナ曰く、ニュースの真偽性は自分の目で確かめるのが一番であるということである。人から情報を得た場合には、誰がどういう目的でその情報を外に放出したかということに注意しなければならない。CPP党の事故に遭った患者がいる病院を訪れ、事故について尋ねたところ、本当にただの事故であることが判明した。雨で道路がぬかるんでいたために起きた事故である。11人が怪我をし、4人が比較的重傷であるようだ。翌日判明したことであるが、私達には教えてくれなかったのだが、実はこの事故で3名の死者が出たのである。タイナとスナイが、カンボジアの人は迷信深く、選挙前に事故で死者が出たことは縁起の悪いことなので外部の人に伝えたくなかったのであろう、と言っていた。特に、CPPの頭首であるフン・センは迷信深いらしい。

USAID が支援している、コンピューター・センターの CIC にメールをチェックしに行った。入口で名前と年齢を書けば、インターネットを無料で使うことができる。12才位の子供達が沢山来ていた。笑顔がとても素敵で可愛らしかったので、デジカメで写真を撮らせて貰った。日本に帰ったら、メールで写真を送りたいから、メール・アドレスを書いて頂戴と頼んだら、子供達がメールアドレスを書いてくれた。タケオの子供達は、人擦れしてなくて、笑顔がとても素敵である。日本の最近の子供達に無いような純粋さを感じた。

## 7月25日(金)

今日は、朝からアンコール・ボレー地区の視察に行くことになった。アンコール・ボレーへは、運河を1時間位ボートで行くより方法が無い。運河は、7世紀に出来たものらしく、ただひたすら真っ直ぐに伸びている。たまに、数隻の地元の人が木のボートで行き来しているのとすれ違う位で、交通量は少ない。私達は、モーター・ボートに乗り込んだ。歴史を感じる運河でモーター・ボートに乗ることが出来たのは、素晴らしい経験だと思う。ひたすら真っ直ぐ続く運河を見て、何て美しい景色なのだろうと思った。アンコール・ボレーは、プノンペンからタケオに着いた時に、今まで見たことの無いような凄い所(開発の後の度合いが)だと思ったが、アンコール・ボレーは、タケオの町中よりも更に凄い感じのする所だった。

CEC のオフィスに向かう途中で、警官がバイクで私達の様子を見に来た。私達に気付かれないようにしているのか、バイクを直しているふりを時々して見せる。村人が、外国人がウロウロしているだけでも、伝えたのであろう。CEC のオフィスは、パゴダの向かい側にあった。23日に投票に関する資料は全て到着したが、投票後、どのようにPECに返すのかはまだ分からないようだ。23日に訪問した CEC のスタッフが言っていたように、ここでも、投票率は雨の影響を受けないであろうと言っていた。前回の選挙での投票率は、93%である。CPP のパレードが昨日あり、7月3日には、ソムランシーがこの地域を訪問している。63人の村人が選挙に使える質の写真を持っていなかったのだが、今はもう皆が持っている筈だそうだ。ある党が、党の支持者に対してオートバイかテレビが当たる抽選会を行うということを知った。投票日と開票日には、電気の自家発電装置が用

意されており、停電対策もされている。CEC 訪問を終え、今来た運河を再びボートで町中まで戻った。昼食後、ゲスト・ハウスに戻ってきて昼寝をした。カンボジアでは、気候のせいか、またよく動いているせいか、沢山眠りたくなる。

夕方から、シー・ショー・レストランで国際選挙監視団のためのミーティングに出席した。スリランカ出身の、アジア財団から派遣された LTO のランジツがミーティングのコーディネーターであった。EU 派遣団、アメリカ大使館、日本政府派遣団、ANFREL チーム、NICFEC、OHCHR が参加し、タケオの一般的政治状況や監視に関する注意などを受けた。村レベルで、脅迫や脅しは、まだ頻繁に見られるらしい。もし、監視の最中に誰かに脅された場合には、その地域の投票所に危険を侵して行くようなことはないようにとの注意を受けた。CEC も、特定の党の関係者が多いため、政治的に偏っているところも見られるが、なるべく中立性を保とうと努力し、問題がある度に、解決しようとしている。市民に関して言えば、政党の綱領も理解していないし、どの政治家に対して票を自分が入れているのか分からない人も、多い。しかしながら、多くの人々が選挙に行くことを恐れずに、楽しみにしており、女性達もまた同じである。ミーティングの最後には、それぞれがタケオ内で投票日・開票日に担当する地域の調整も行った。

### 7月26日(土)

朝の8時にゲスト・ハウスを出発。タイナがお葬式の行列を見掛けたのだが、見に行くかと尋ねてきたので、私もスナイも、イエスと答えた。行列の規模から見て、恐らく、かなりの金持ちのお葬式らしい。漢字が旗等に書かれているところからみれば、中国系カンボジア人のようだ。地元の人から見れば、外国人がお葬式を追いかけて来て不思議な光景であったであろうが、そのお葬式は、人類学的に見ればとても興味深いものだった。死生観に関する考え方の違いが見れたような気がする。外国人の私達の意見が一致したのは、何故かこのお葬式の行列からは悲しい感じが全然しないのである。楽団のグループが音楽を奏でていたのであるが、どんな音楽かという、今までに聞いたことのないような不思議な民族的音楽の音色で、悲しさが感じられず、何だか美しい音楽で、もっと聞いていたいと思われるような曲だった。日本のお葬式に行くと、悲壮感が漂っているし、タイナも、フィンランドだってそうなのに、どうしてこの行列から悲壮感を感じないのだろうか、と不思議がっていた。

朝食後、通訳のサロムの家を訪ねた。タイナがサロムの家族の写真を撮ってあげる約束をしていたためである。ここでは、カメラを持っている人は少ないし、写真は特別な時のものだけとされているから、写真を撮ってあげたいのだそうだ。デーの家族の写真は、既に前に撮ってあげている。サロムの家は、カラオケ屋さんを営んでいる。どうして電気が十分でないのにと不思議に思われるのだが、タケオでは、カラオケが結構人気で、レストランでもカラオケのビデオが流されている。サロムの家に着いてびっくりしたのは、その同居家族の多さである。その時出て来た家族だけで、ざっと20人は居た。これこそ、アジア的家族というのであろうか。サラム側の家族とサラムの奥さんの両方の家族が同居している。サロムは27才で、5才の息子さんがいる。奥さんは美人だ。サロムは、英語をカンボジア国内で勉強した。以前は英語の教師をしていたが、最近は通訳をしている。以前に JICA の農業プロジェクトで通訳を務めたこともある。家の庭にあるヤシの実を取ってきて、ストローを刺して、ヤシの実ジュースでもてなしてくれた。タイナのカメラのフィルムが終わってしまったため、私が写真を引き続き撮ることを頼まれた。ただ、家が暗かったため、フラッシュを使わなくてはいけなかったため、すぐに電池が終わってしまい私のカメラでも撮ることが出来なくなってしまった。サロム

に、写真を送るから住所を教えてと言ったところ、今までに郵便物を受け取ったことが無いから分からないので、調べておくという返事だった。

昼食後、ソムランシー党のオフィスを訪問した。私達と対応してくれた方は、英語が割と上手で、通訳無しでコミュニケーションをとることが出来た。昨日、集会を開いたらしい。会話の途中で党員の人の携帯電話が鳴った。ミュージカル、アイーダの曲である。アイーダと言えば、勝利の行進の話である。縁起をかついでいるのだろう。ソムランシー自らが、タケオに来た時には、8000人もの人々が来たという。現在、タケオには8議席あり、ソムランシー党は1議席、CPP党が4議席、フンシンベック党が3議席持っている。ある党が、票の買収行為を行っていて、3000~5000リエルを夜間に人々に配っているという。党員の人が、ソムランシー党の理念について語ってくれた。タケオには、お金持ちの人はほんの一握りしかいなくて、大半の人達が、食べ物もなく、困っている状態である。(タケオは、比較的貧しい州であり、十分な食糧確保が出来なく、また、安全な飲料水を確保するのも難しい。ちなみに、タケオで、安全な飲料水にアクセス出来るのは、全体の12.9%のみの人である。)ソムランシー党は、お金が無いから、人々にお金を配ることは出来ない。だけれども、人々に、こう言っている。贈り物というのは、一日しかもたない、しかし、民主主義というのは、長い間もつことが出来る。今回の選挙では、死んだ人もいないし、暴力行為も行われていない。これは、プラスの変化だと思う。その理由の大きな一つとしては、アメリカが今回の選挙を近くで見ているという要因が考えられる。アメリカ大使館の第一書記官が、タケオを訪問している。(アメリカが、今回の選挙を平穏無事に終わらせれば、経済的援助を約束しているという話も耳にした。)故に、選挙の後の報復も心配していないという。1998年の時には、EUの監視団は、3日間しか滞在しなかったが、今回は早くから来てくれたのも、プラスの変化であると言っていた。

## 7月27日(日)

Peaceful Heart で皆で朝食をとった後、今日から2つのグループに別れて行動をすることになった。スナイ、サロム、私の3人は、アンコール・ボレーに行き投票所を監視することになり、タイナは、お隣のカンポート州に、デーと2人で車で行くことになった。二手に分かれる前に、サロムとデーの投票をまず済ませることにした。2人とも、投票をととても楽しみにしている様子だった。

デーの投票所へ行ったところ、壁に張り出してある投票者一覧票の中に彼の名前を見付けることは出来なかった。よって、彼は投票をすることが出来なかった。次に、サロムの投票所にも行ったが、彼の名前もなく、投票することが出来なかった。どういうことかということ、2人とも、前回の選挙の時に、選挙人登録はしているが、投票を行っていない。今回の選挙で投票出来るのは、前回の選挙で投票した人か、今回の選挙で選挙人登録した人達のみである。前回の選挙で、選挙人登録しても、実際に投票を行っていない場合には、今回の選挙のための選挙人登録をしないと、投票が出来ない。我々の周りのカンボジア人2人の内の2人共が投票を行うことが出来なかったのだから、これはきっと希なケースではなくて、多くの人と同じように投票出来ないのかもしれない。選挙人登録に関する基礎的な情報が、皆にしっかりと行き渡っていないのである。タイナが、このことの選挙結果に与える影響を気にしていた。前回の選挙で勝ったのは、CPPである。ということは、前回の選挙で投票していない人を排除するということは、今回の選挙結果が前回の選挙結果の影響を受ける可能性もあり、公平性の心配をしていた。

デーの投票所が、タケオでの最初の投票の監視の場となった。3つの投票所が1ヶ所に集まっていた。中で男性と女性の投票者の統計をとっていたが、男女の投票者はほぼ同数であり、女性の方が僅かに少なかった。車椅子の男性が投票をしに来たが、先に投票をさせてもらっていた。障害

者の人は、投票の順番を優先させて貰えるらしい。ある党が、選挙に来る人の輸送をしているという情報を耳にした。

今回は、万が一のためを考えて、ライフ・ジャケットを借りてボートに乗り込み、アンコール・ボレーに向かった。車の足がないので、モーターを3人分雇って投票所を回るようになった。一番近い、小学校の投票所から回ることにした。ここは、3つの投票所が1ヶ所に集まっている。庭にセキュリティ・ガード達が待機していた。年寄りや子供を連れた女性達は、先に投票出来るらしい。1つ目の投票所では、投票用紙の裏側に押してあるスタンプをチェックしていなかった。投票者達の中で、投票者番号、投票所番号、投票者氏名が明記された紙を持っている人達を見掛けたので、どのようにその紙を入手したのか尋ねたところ、選挙人登録の際に貰ったそうである。

次の投票所に行ったところ、NICFECの監視員が居たので、今見てきた投票者番号などが記載してある、白い紙の存在について質問したら、確かに、CECが配付し、投票者が選挙をしに行きやすくするために配付したものであるらしい。CONFRELとも、この件に関して確認済みであるという。CECのチェアマンがいたが、何も問題は起きていないと言っていた。

次に、5つの投票所が1ヶ所になっている所に行った。この投票所はどれも皆、比較的スムーズに投票が行われていた。投票用紙のスタンプもチェックしていたし、投票者の手のインクも入念にチェックしていた。1つの投票所は、日本のODAの草の根資金によって建てられたものである。ニカラグアで見たODAによる小学校よりも、はるかに質素に見えたが、この村の状況によく合って建てられているものに思われた。カンボジア風に作られた校舎は、風通しが良く、他の校舎と比べて非常に涼しかった。また、ティンで作られた屋根の校舎なども他にはあったが、これなどは、雨の際にはすごい音がする。この投票所の投票予定者数は351人であるが、朝の10:10の段階で、既に281人が投票を済ませている。

昼食をとった後、5つの投票所が一緒になっている所に行った。どの投票所でも、もう既に多くの人が投票を済ませていた。例えば、一投票所では、11:50の時点で、611人の投票者の内、まだ投票に来ていないのは、65人のみである。この投票所が私達のモーターのドライバーの一人の投票所らしく、投票をしようとしたのだが、問題が起きた。彼が投票をしようとしたら、投票所のスタッフが、彼は投票が出来ないと言った。何故なら、彼は既に投票したという噂を投票所の前で人々がしていたのを聞いたからであるという。しかしながら、投票者リストの方には、彼は既に投票した者としてはチェックされていない。しばらく色々な人と確認をとったり、CECのチェアマンと確認をとった結果、彼は未だ投票をしておらず、投票が出来ることになった。

ある投票所の前で、かなり年配の男性が私達に話し掛けてきた。彼は、投票所の近くでベトナム人と思われる人達の写真を撮っていたところ、カメラをCECのスタッフに没収されたので、返して欲しいのだと私達に訴えに来たのである。話をよく聞いてみると、某党からカメラを渡され、不信な者を見掛けたら写真を撮るようと言われていたそうである。どうしてその写真を撮った人達がベトナム人だと分かるのかと尋ねたら、確定的な証拠があるわけではなく、ベトナム人に「見えた」からであるという。タケオはベトナムに隣接している州であり、特にベトナム人に対する嫌悪感が感じられる。スナイが携帯でプノンペンにいるANFREL事務局のソムスリと確認の連絡をとったが、投票所の近くでは、国際監視員以外は、写真を撮ってはいけないことになっているようで、CECのスタッフがとった行為は、合法であるという。この投票所の担当者と確認もとったところ、問題のベトナム人らしき人達は、投票者カードも持っていたし、投票者一覧表にも名前が載っていたために、投票はさせたと

うことだった。カンボジアに長く住んでいるベトナム人かもしれないし、とにかく彼等が選挙に参加したのは、合法的なことである。

更にモーターに乗って、最後の2つの投票所へ行った。3時の投票終了の1時間15分前の時点で、投票率はかなり高かった。1つ目の投票所では、有権者の80%の575人が投票に来ている。次の投票所では、681人の有権者の内、598人が投票に来たという。どちらの投票所でも問題はなかったが、投票用紙に関わる技術的な問題は2点あったという。一つは、投票用紙の裏のスタンプがはっきりしていないものがあったのと、投票のチェックが、表でなく裏にされていたことである。

最後の投票所の監視を終えて戻る途中に、某党の候補者がかなり上手な英語で私達に話し掛けてきた。君達は、国際監視員かい？我々の党は、他の党から脅迫を受けているのだということを伝えておきたかったとだけ言ってきた。

モーターに乗り、ポート乗り場まで行き、ゲスト・ハウスを目指し帰路に着いた。夕食に向かう途中に、約束ではカバーされてなければいけない筈の、選挙キャンペーン用のサインボードがカバーされていないのを見掛けた。ゲスト・ハウスに着いた時には、軽い頭痛がし、軽い日射病の様な症状があった。水分を多めにとり、日焼け止めを塗り、大きなつばのある白い帽子を目深にかぶって日射病対策をしていたのであるが、日中は全然雨が降らず、快晴の一日で、お日様がぎらぎらする中を外に長時間いたのだから、なっても仕方が無いという感じである。(雨は、ゲスト・ハウスに帰り着いた途端に、どしゃ降りになった。)日本から日射病対策に持ってきたおでこに貼るシートを貼って、扇風機を回したまま寝たら、朝起きた時には、何ともなくなっていた。

## 7月28日(日)

今日は開票日である。朝の8時にゲスト・ハウスを出発し、アンコール・ボレーに向かった。開票の際には、3ヶ所の投票所が1ヶ所に集まった所だけを監視することにした。ここは、投票日に来て、ベトナム人の写真騒動があった投票所である。国際監視団の人達が来てくれて嬉しいと歓迎された。不正が無いところをじっくり見て帰って行って欲しいと言われた。到着したのは、9時頃であるが、開票を少し始める前の、投票箱の封の連番号の確認の最中から監視を始めた。開票の前に作業に手間取っていたため、開票まで時間がかかなりかかったそうである。9:40になって、ようやく開票が始まった。投票用紙が一枚一枚丁寧に開かれ、開票者は、開票所の中にいる全ての人達にはっきり見えるように、投票用紙を皆の方に見えるように一周させてから、記録していった。特に、国際監視員の私達の方に、気を使って見せてくれているのが良く分かった。米印のようなものや、四角、または横棒等の規定外のマークをしている投票者達がいて、彼等の投票用紙は、一旦、横に置いておかれることになった。投票用紙の記入用紙の問題以外は、何の問題もないようなので、午前中に帰路に着くことにした。

午後になって、レポートをANFREL事務局にメールで送るために、CICに行った。この前CICに来た時にいた、女の子達が居た。目が合う度にニコツとお互いに微笑むのを何回か繰り返している内に、女の子の一人が私の方へやって来たので、彼女と一緒に女の子のグループのいる所へ行った。何故だか分からないのだが、私は、特に外国に行く子供達が寄って来るのだ。何故だか自分でもよく分からないのだが、きっと、子供達が私も子供の一人で彼等の仲間だと思うのだろうか。一人の女の子が、私に、いつ帰るの？と尋ねた。明日の朝プノンペンに向けて出発して、翌日には、日本に帰るんだよ、と答えたら、あげたいものがあると言われた。刺繍糸で編んだ、リストバンドをくれたのだ。私も中学生の頃、凝って編んでいたのを覚えている。そのリストバンドは、黒と灰色の刺繍糸



で編まれていた。今編んでいる、青の綺麗なリストバンドを見せてくれて、本当はこれをあげたいのだけれど、明日の朝に出発してしまふのなら、間に合わないからしょうがないわねと言った。リストバンドが、とても嬉しかった。自分でも編んだことがあるから、編むのに時間が掛かり、大変なことはよく知っている。くれた女の子の気持ちが嬉しかった。

色々なおしゃべりをした。将来は何になりたいの？と尋ねたら、分からないわ、とリストバンドをくれた子が答えた。でも、外国に行きたいわ、と行った。じゃあ、しっかり勉強すれば、将来奨学金をもらって外国で勉強をすることが出来るかもしれないし、良い仕事に就いて、海外に出張で行かれるかもよ、と私は言った。私は、あえてこの質問をこの女の子達のグループにした。自分が16才でオーストラリアに留学していた時に、学校の友達がよく私に「何になりたいの？」という質問をしたからだ。最初の頃の答えは、「分からない。」だった。自分が何になりたいかなんていうことは、日本で生活していると考えないことだった。受験勉強をして一流大学に入ることが人生のルールになっている日本で、自分が何になりたいかという夢についてよく考えたことはなかった。特に、女子の場合は、結婚することが重要で夢なんか余り考えないのが普通だった。でも、私は、このオーストラリアでの質問で、16才の時に将来国連で働くことを決めた。そして、あれから大分たった今、最近やっと自分の夢をかなえることが出来たのだ。だから、もし、私が質問したことが、この女の子達の頭にひっかかっていて、将来の人生にプラスに働いたら、嬉しいなと思った。カンボジアは、日本のように女性が表社会で活躍していない社会だけれど、女の子だというだけで、夢を持つのをやめて欲しくないと思う。5:30から英語のクラスに通っているの、と言って女の子達のグループは自転車に乗って帰って行った。

シー・ショー・レストランでの夕食で、カンポートから帰って来たタイナとデーと再び合流した。タケオの快晴の天気で日射病に悩まされた私と反対に、タイナはひどい風邪に悩まされていた。2日間、冷房がききすぎた車中にある時間が長かったので、風邪を引いてしまったようだ。夕食の後、ゲストハウスに戻って来て、サロムとお別れをした。デーは、私達を送るためにプノンペンに来るが、サロムと会うのは、今日が最後だ。

## 7月29日(火)

プノンペンに向けて出発する前に、寄っていく所があった。まず、PEGにお別れを告げに行ったが、投票用紙がいっぱい入った袋が散漫しており、忙しそうだった。その後、ソムランシー党とフンシンベック党にもお別れを告げに行った。皆に私達がプノンペンに帰ることを伝えた後、プノンペンに向かった。雨の影響が出ているというので、来た時の道は通れず、違うルートでプノンペンに帰ることになった。疲れからか、帰り道は、車の中で殆ど寝ていた。長靴を履いたままプノンペンに着いたら、多くの人に長靴を不思議そうに見られた。次回、タケオに行く人は、長靴と丈の長いレインコートを持って行かれることをお勧めする。日本からプノンペンに着いた時に、世界の最貧国の一つであるカンボジアの首都であるプノンペンにはひどく田舎に見えたのであるが、タケオから帰って来ると、とても都会に見えた。何よりも、震えることなく、久しぶりにお湯のシャワーが浴びられるとただ嬉しかった。

## 選挙監視を終えて

私は、今回の選挙監視参加によって、大きな宝物を貰って帰ってきたような気がする。2週間の間に、色々なことについて学び、体験する機会を与えられた。どちらかというと不安と疑問の方が多かった

マイナス出発の旅が、カンボジアと民主主義についてより理解を深め、プラスの方が多くなって帰って来た旅だった。

この選挙監視を経験して、大きく分けて6つ考えたことがある。

## 1. 国際監視員の重要性

国際監視委員の重要性というのを、体験して感じた。出発前のインターバンドのミーティングで、国際監視員になることと旅行者との違いについて皆で考えたが、このことについて、体感出来た。百聞は一見にしかず、である。カンボジアの民主化という大きな政治の流れの一部に自分が微力ながらもなれるということは、とても達成感があるものである。

## 2. ANFREL チームのメンバーになったこと

学校の授業で人権の授業をとると、必ず、学者の世界で議論されている、西欧対アジアの価値観の対立について学ぶ。特に、アジアの非民主国家の政府代表者によって、アジア的価値観と西欧で生まれた民主主義の価値観は相容れないという主張がなされる。学者の社会でどんな議論がなされていようと、今回のカンボジアの選挙でも分かるように、アジアの市民達で民主主義を望む人達は、大勢いるということだ。ANFREL という団体のもとに、アジアの市民達が集まり、真にカンボジアの民主化を望むことが、その証拠である。また、ANFREL に、アジア各国、そしてアジア以外の国からも人が集まり、人々が国籍を超えてカンボジアの民主化のために力を合わせたというのは、素晴らしいことである。

## 3. カンボジアについて

カンボジアの選挙が今回のミッションの主旨ではあるが、それと同時に、選挙以外の枠で、カンボジアという国について、文化、どんな人達が住んでいて、どんな生活をしているのかというところがよく分かり、カンボジアが身近になった旅であった。カンボジア人は、どこことなく日本人に似ているような感じを受けた。日本人と同じようにお米を主食とし、魚を多く食べるのには、びっくりした。昔の日本人の控えめさなどの美德をまだ持っているような感じがした。一番印象的なのが、人々の明るい微笑みと、人擦れしていない素朴さである。

## 4. 日本のアジアの民主化支援

選挙の監視をしていて、日本が国としてカンボジアの民主化に大きく貢献している姿を目の当たりにした。選挙の投票箱が日本政府提供だということには、正直驚いたし、日本政府の選挙監視派遣団は、一国が送った監視団としては最大のものだった。自分達の国が比較的に経済発展を遂げており、カンボジアの民主化という素晴らしいプロセスに貢献が出来るというのは、幸せなことであると思う。平和を望む日本人というプラスのイメージにも貢献出来るのではなからうか。また、日本が民主化に貢献する点には、メリットもあると思う。アメリカのような国が政治的介入をする場合、国益がどうしても見え隠れするが、日本は、比較的中立的なイメージではなからうか。また、アメリカなどの西洋の国による援助の場合、自分達の価値観の押し付けになることが残念ながらあるが、日本は、同じアジアのメンバーであるということで、相手国の考えていることや文化が理解しやすいのでは。

## 5. 日本国内の政治意識の低さ

日本のアジアの民主化支援を誇らしいと思うと同時に、自国内の国民の選挙参加の意志の低さに懸念を感じる。日本は、他の先進国と比べると、一般市民レベルにおける政治に対する認識がかなり低い。カンボジアという他国でこれだけ、民主化を支援しているのであれば、国民一人一人が、もっと主体的に選挙や日々の政治に関わって欲しいものである。日本は民主主義を戦後上から与えられ、今では当たり前のようにそこにある。自分達の手で勝ち取ったものではないからか、国民の政治に対する主体性がなさ過ぎる。最近まで内戦のあった、カンボジアのような国に行って選挙監視に参加すると、民主主義は、当たり前になって良いものではないということを考えさせられる。せっかく、幸運にも、我が国では途上国のような大きな政治問題がないのだから、もっと今ある政治システムを有効に活用しなければならないと思う。当たり前のように持っている選挙権だから、選挙に行く人が少ないのは悲しいことだ。国際協力も大切だが、自国についても考えなければならないと思う。

## 6. 民主主義について

カンボジアの選挙を監視すると、民主主義の複雑さについて考えさせられる。選挙は、確かに、民主主義において大事な要素である。民主主義に大きく一歩を踏み出すのに不可欠なものである。民主主義イコール選挙という考えが大きい中、カンボジアを訪問すると、民主主義の複雑さについて考えさせてくれる。民主主義は、選挙だけでなく、色々な要因と複雑に絡み合っている。タケオでは、非識字率と教育レベルの低さが大きな問題である。読み書きが出来ない人もいて、小学校レベルの教育しか受けていない人が多い中、本当に民主主義や選挙の意味、それぞれの政党の理念を理解しているのか疑問に思う。また、タケオは、貧困が多い地域であるが、今日の暮らしに困っていれば、民主主義よりも、票を売ってお金を貰う方が切実なことなのではないだろうか。脅迫や暴力があるなか、恐怖を感じずに自分の意志道理に立候補したり、投票することが出来るのであろうか。

また、次回、アジアの選挙監視に是非参加したいと思う。特に、カンボジアの次回の5年後の選挙には、機会があれば、参加したいと思う。カンボジアの民主主義がどの位育ったのかを見るのが、とても楽しみだ。近い将来に、出会ったカンボジアの子供達が大人になる頃には、自分のやりたいことが今よりは自由に出来るようになっていきますように。

この素晴らしい機会を与えてくれた、インターバンドに感謝しています。また、タケオ・チームの素晴らしいメンバーに恵まれたことに、感謝します。